

# 「他者の自伝」としてポストコロニアル文学を読む

## 『アフリカの日々』にみる 植民地と女性

80年代にメリル・ストリープ、ロバート・レッドフォード主演で話題を呼びアカデミー賞を受賞した『愛と哀しみの果て』という映画があります。デンマーク人の主人公カレンが英国領ケニアに渡って、広大なコーヒー農場を経営するケニアでの生活をややセンチメンタルに描いたものです。

ストリープ演じるカレンのモデルとなったのは、アイザック・ディーネセンという筆名での *Out of Africa* 『アフリカの日々』(翻訳書名) という自伝的著作で知られる作家です。ディーネセンは、1910年代にケニアに渡り、コーヒー農場を経営しました。31年に経営難で農場を売り渡しデンマークに帰国してから、アイザックという男性名のペンネームで執筆活動を始めました。

ケニアでの体験を綴った自伝作品が『アフリカの日々』。この作品は時代背景を映して、帝国主義的な面が色濃くあります。ヨーロッパ女性は植民地にあっては支配者の一員であり、アフリカ人にとっては男性と変わらない存在でした。ですが、自伝の中に描かれるディーネセンは、台所で現地人の使用人と一緒に料理をするなど、男性とは違った形でアフリカ人と親密に交流しています。そうした交流をもとに語られるアフリカが、男性の行政官や人類学者が書くアフリカとはやはりどこか違うのも事実です。植民地の支配者であることと「女」であることのあいだのズレから生じる曖昧さや危機感をこうしたテキストのうちに発見するのも、批評の重要な作業なのです。

## 支配者の言語である英語で 創作するジレンマ

私の専門は大雑把にいえば、20世紀英語文学と批評理論、とくにポストコロニアル (postcolonial) 批評と呼ばれる分野です。ポストコロニアルとは、植民地支配以降という意味ですが、同時に植民地支配の遺産をいまだ背負い続けているという意味でもあります。植民地支配による負の遺産を、現在に生きる自分たちの問題として見つめ直そうとするのが、ポストコロニアル批評だといえます。

一般的にポストコロニアル文学と呼ばれるのは、旧植民地出身者

による英語作品です。英語は20世紀に入ったころにはすでに、ある種の「国際語」となっていました。ディーネセンはヨーロッパ人でしたが、非ヨーロッパ人であるインド人やアフリカ人にとっても、英語は思索活動や自己表現の手段になっていたのです。

もっとも、植民地支配者の言語である英語を使って創作活動を行うことには、多大なジレンマがあります。現在、多くの作家が英語で創作活動を行っているのは、英米人の読者を意識するというよりは、アフリカ、アジアといった地域のなかでも、国家の枠を越えた国際的な交流ができるからです。しかしながら、そうした「便利な」英語で書くことをあえて拒否する動きもあります。私が2000年に刊行した著書 *The English Book and Its Marginalia* の一章で取り上げたケニア出身の作家ングキ・ワ・ジオンゴは、英語での創作活動を放棄して母国語による執筆を行うようになった作家の一人です。ングキは、アフリカ人がアフリカの言語で文学を創作することを阻む言語帝国主義の壁を鋭く批判しています。民族文化が共通の言語により生成される以上、文学の言語は民族文化に貢献すべきだという考えからです。植民地支配の歴史の遺産への抵抗として生まれてきたこのような考え方を、偏狭な言語ナショナリズムとして批判すべきではないと私は思います。

## ポストコロニアル文学と 「他者の自伝」

ポストコロニアル文学はしばしば、作者の人生と対応させることなくして読解できない文学だなどと考えられています。さらにはまた、インドやアフリカの作家が自分の人生を描くことは、自分の民族全体の歴史を語ることだとみなす読者も多くいます。しかしその一方で、ポストコロニアル文学には、そのような自伝性そのものに対する痛切な批判意識が秘められていることもあるのです。古典的な自伝に抵抗し、そこから逸脱しようとする自伝的テキスト。こうしたテキストを私は仮に、「他者の自伝」と名づけてみました。「他者の自伝」としてテキストを読むということは、読者の側にもそれなりの覚悟が問われます。そこでは自伝作者とは、容易には共感できない、自分とはまったく異なる経験と言語を持つ他者だからです。

現在は、20世紀前半、いわゆるモダニズム期における「自己」概念の変容に興味をもっています。たとえば、アフリカ系アメリカ人思想家 W. E. B. デュボイスの自伝的著作に注目しています。人種、ジェ

ンダー、セクシュアリティといった問題系が現代的な「自己」概念の構築にどのように関わるのか、探っていきたいと考えています。

## 自分の研究課題に結びつけるために テキストをどう読むか

言語社会研究科の授業では、大学院生と一緒に議論を重ねることで授業を作り上げていきます。本年度の講義では、やはり自伝をテーマに、20世紀後半以降の自伝を巡る批評・理論の概説、モダニズム期の自伝を扱いました。

大学院の私の授業を受けに来る学生のなかには、狭い意味での文学、文化研究ではなく、より社会科学的な分野、たとえば歴史や地域研究を志向する学生が多くいます。テキストを単なる「資料」として読んでしまいがちなそうした学生に接することで、テキストを読むとはどういうことなのか、あらためて考えさせられています。

一橋大学の学部生は、正直、いわゆる勝者としての体験しかしてこなかった人がほとんどですから、文学を通じて負の要素を背負った人々の生活を疑似体験し、それを想像する能力を養うことも必要なのではないでしょうか。あるいは狭義の文学ではなくても、世の中のすべての事象を「テキスト」として批判的に読み、そこにどういうレトリックが使われているかを知り、さらにはそこに書かれていないことまでも想像する訓練をするべきだと思います。(談)



言語社会研究科准教授

中井亜佐子

Asako Nakai

1992年3月東京大学人文科学研究科修士課程(英語英文学専攻)修了。

1996年3月

オックスフォード大学英文学部博士課程修了。

2002年4月より

一橋大学大学院言語社会研究科准教授。

2006年8月～2007年8月

フルブライト客員研究プログラムによりカリフォルニア大学バークレー校にて客員研究員。

専門は英国モダニズム文学、現代英語文学、批評理論。

著書に *The English Book and Its Marginalia* (Rodopi)。

『現代批評理論のすべて』(共著/新書館)

『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950年』

(共著/慶應義塾大学出版会)

『他者の自伝』(研究社)など。



古い本(写真中:開いている本)は、

*In Court and Kampong*。

駒場の古書店で偶然見つけたもの。

博論で扱った作家ジョセフ・コンラッドの友人で

英領マラヤの行政官だった

ヒュー・クリフォードが、マラヤのことを書いた本。

「ジャーナリズムにして文学にあらず」と

コンラッドからは酷評された本だが、

著者実筆の献本の辞が書き込まれているのが、単純に嬉しかった。

ほかには、最近著の『他者の自伝』と

著書 *The English Book and Its Marginalia*。